

露萩

泉鏡花作

全一章

「これは禎さん入らつしやい。」

「今晚は――大した景氣ですね。」

「お化に景氣も妙ですが、おもひのほか人が集りましたよ。」

最近の事である。……今夜の怪談會の幹事の一人に、白尾と云ふのが知己だから禎を別間に迎へながら、

「かね／＼聞いて居ります。何時も、此の會を催しますのに、故とらしく、凄味、不氣味の趣向をしますと、病人が出来たり、怪我があつたりすると言ひます。――また全くらしうございますからね。

蒟蒻を廊下へ敷いたり、生大根の片腕を紅殻で落したり、芋苗で蛇を擦り下げたり、一切そんな惡戯はしない事にしたんですよ。ですが、婦人だけでも随分の人數です。中には怪談を聞く人でなくて、見るつ

もりで来て居るのも少からずと言つた形ですから、唯ほんの景ぶつ、口上ばかりに、植込を向うへ引込んだ離座敷に、一寸看板を出しました。――百もこの語にはつきものですが、あとで、一人づゝ順に其處へ行つて、記念の署名をと云つた都合なんで、勿論、夜が更けましてから……」

――此の時もう十一時を過ぎて居た。槇眞三が、旅館兼料理屋の、此の郊外の緑軒を志して、便宜で電車を下りた時は、眞夏だと言ふのに、もう四邊がひっそり寂寞して居たのであつた。

「……最も、行儀よく一人づゝ行くのではありません。いづれ亂脈でせうから、いまのうち凄いい處。――はゝゝ、凄くもありますまいが、ひとつ御覽なすつて、何うぞまた、何かと御注意、御助言を下さいまし。」

「御注意も何もありませんが、拝見をさして頂きませう。」

「さ、何うぞ此方へ。」

――後で芳町のだと聞いた、若い藝妓が二人、

馴染で給仕をして、いま頃夕飯を、・・・ちやうど茶をつがせて箸を置いた。何う見ても化ものは縁の遠さうな幹事の白尾が、こゝで立つと、

「あら、兄さん、私も。」 「私も。」 と取りつくのを、 「お前さんたちはあとにおし。」 で、袖を突いて、幹事室を出るのに、眞三は續いた。

催はまだはじまつて居ない。客は會場の廣室に溢れ、帳場にこぼれ、廊下に流れて、わや／＼とざわめく中を、よけるやうにして通つて、一つ折曲る處で、家内總出で折詰の支度に料理場、臺所を取亂したのを視ながら、また一つ細く成る廊下を縫ふと、其處にも、此處にも、二三人、四五人づゝは男、女が往來ふ、イむ。何しろ暑いので、誰も吹ぬけの縁を慕ふのであつた。

「では、此處から庭へー」

「あれですか。」

眞三は、此の料亭へは初めてだつたし、夜である。何の樹とも知らないが、此が呼びものゝ、門口に森を控へて、庭の茂は暗いまで、星に濃く、燈に青く、

白露に艶かである。其の幹深く枝々を透して、ぼーつと煤色に浸んだ燈は、影のやうに障子を映して、其處に行燈の灯れたのが遠くから認められた。

二枚か、四枚か。．．．半ば、葉の陰にかくれたが、亭ごのみの茶座敷らしい。障子を一枚細目に開けてあるのが、縦に黒く見えて、薄か、蘆か揺ぐにつれて、此の催とて、思ひなしか、長く髪の毛の動くやうな色が添った。

「下駄があります、薄暗うございますから。」
「やあ、きみぢやつたな、．．．先刻のは。」

縁のすぐ傍に居て、ぐるりと毛脛を捲つたなりで、眞三に聲を掛けたものがある。言つきで、軍人の猛者か、田舎出の紳士かと思はれるが、然うでない。赭ら顔で一分刈の大坊主、六十近いが、でつぶり膏肥がしたのに酒氣をさへ帯びて居る。講中なんぞの前らしい、目に立つ浴衣に、萌葱博多の幅狭な帯をちよつきり結びで、二つ提げ淀屋ごのみの煙草入を

ぶらつかせ、はだけに はだけた胸から襟へ、少々
誇張だけれど、嬰兒の拳ほどある、木の實だか、貝
殻だか、赤く塗った大粒を、ごつ／＼ごつと、素ば
らしい珠数を掛けた。まくり手には、鐵の如意かと
思ふ、然も握太にして、丈一尺ばかりの木棍
を、異様に削りまはした。―― 憚なく申すことを
許さるゝならば、髣髴として、陽形なるを構へて居
る。

―― 槓眞三は、こゝへ来る、停車場を下りた
處で、實は一度、此の大坊主に出會つた。居處は違
つたらしいが、おなじ電車から、一步おくれて、の
つし／＼と出たのである。―― 馴切つた、土地の
人らしいのが三四人、おりると直ぐに散つたほかは、
おなじ向きに緑軒へ志すらしいものゝ影も見えな
つた。思ひのほかで。……夜あかしたと聞く
怪談には、此の時刻が出盛りで、村祭の賑ぐらゐは
人足が落合ふだらう。俾も並んで居るだらう、・
・・は大あて違ひ。たゞの一臺も見當らない。前
の廣場も暗かつた。

改札口を出たまで、人に聞かぬと、東西を心得ぬ、立定んで猶豫ふ處へ、顯はれたのが大坊主で、

「やあ、君。」

と、陣笠なりの汚れくさつたパナマを仰向けて、
「緑軒の連中ちやあないかな。――俺も此處は、
じめてだ。乗った電車から戻り氣味に、逆に踏切を
一つ越すつてこつたで、構はずその方角へ遣つけよ
う。……半分寝て居る煙草屋なんぞで道を訊
くのもごうはらだからな。」

眞三は連立つた。

「化ものゝ會ぢやあねえか、氣のきかねえ。人魂
でも白張提灯でも、ふはり／＼出迎へに來れば可い。
誰だと思ふ、べらぼうめ。はッはッはッ。」

最う微酔のいゝ機嫌で、

「――俺は淺草の根元教と言ふ、新に教を立
てた宗門の先達だよ。……あとで一説法刴ね
かすが。――何せい、此の一喝を啖はすから、出
て來た處で人魂も白張も、ぼしや／＼は、ぼしや／

「だ。」と、そいつが斑剥だが眞赤に朱で塗つてある。――件の木綿で掌をドカンと敲いた。

眞三は、此の膏濃い入道は、處も、淺草だと言ふ。・・・・・むかしの志道軒とかの流を汲む、慢心して講釋家かなんぞであらうと思つた。

會場へ着いて、帳場までは一所だつたが、居合せた此の幹事に誘はれて、而して彼は別室へ。

「え、先刻は。・・・・・彼處に、一寸した、つくりものがあるんださうです。」

「うむ、御趣向かい。見ものだらう。見ぶつするかな。・・・・・わい。」

どしんと縁へ尻餅を搗いた。

「苔が、にる。庭下駄の端緒が切れて居やあがる。危えぢやねえか。や、ほかに履きものはがあせんな。はてね。」

「お氣をつけなさいまし。」

それなり行かうとした幹事の白尾を、脛を投出し
たまゝ呼留めた。

「氣をつけねえぢや居られねえや　ー　もし、
徽章を着けて居なさるからには世話人だね、肝煎だ
ね。此の百二三十も頭数のある處へ、庭へ上り下り
をするなり、その拵へものを見に行くなりに、お前
さんたちが穿いて二足、緒の切れた奴が一足、たつ
た三足。．．．何、二足片足しかねえと云ふの
は何う云ふ理合のもんだね。」

「何うも相済みません。ですが、唯今は、ほんの
此は内々の下見なので。．．．後に御披露の上、
皆さんにおいでを願ふ筈に成つて居ます。しかし、
それとても、五人十人御一所では。．．．甚だ幼
稚な考へかも知れませんが、何の凄味も、おもしろ
みもありません。．．．お一人、せゐ／＼お二
人ぐらゐづゝと思ひまして、はきものゝ數は用意を
しません。庭を御散歩なさいますなら、下足をお取
りに成つて。．．．御自由に。」

「あら、一人づゝで行くの、可憐いわね。」
と、傍ぎゝして、連らしいのに、然う云つた頸の

白い女がある。

「何が可恐いものか。へん、俺がついてる。」

その連でもないので、坊主は腕まくりをして、陽木棍で膝を敵いて出しや張つた。

「坊主、一言もありませんな。」

植込を低う抜けながら、眞三が言つた。その槓だが、いまの辨解を聞くまでは、おなじく、此の人数に、はきものゝ其の数は、と思つたのださうである。

處が、

「いゝえ、出たらめに遣ツつきましたがね、・・・ハツと思ひましたよ。まつたくの處不行届きだつたんです。・・・あれではとても足りません。何てツたつて、どうせ大勢でせうから、大急ぎで草履でも買はせて間に合せる事にしなければなりませんまい。」

「で、後にその草履の用意は出来た。變化、妖怪、幽霊、怨念の夜だからと言つて、そのために裾足の事にこだはるのではないのだが、夜半に、はきものゝ数さへ多ければ、何事もなかつたらう。・・・多人数が一所だから。處が、庭はじと／＼し

てゐる。秋立つて七日あまりも過ぎたから、夜露も深い。……人の出あしは留めなかつたが、日暮方、町には薄い夕立があつた、それが此の邊はどしや降り以降つたと言ふ。停車場からの窪地は道を拾ふほど濡れて居た。然も植込の下である。草履は履く時からべつとりして、踏出すとぐつしよりに成る。納涼がてらの催だが、遠出をかけて、かへりは夜があけるのだから、いづれも相應めかして居て、羽織、足袋穿が多かつた。また其の足袋を脱ぐのが、怪しい仕掛のあると云ふ、寮構へ踏込むのに、人住まぬ空屋以上に不氣味だから、無造作に草履ばきでは下立たないで、餘程ものずきなのが、下駄のあくのを待つて一人、二人づゝでないと、怪しい席へ入らなかつた、――そのために事が起つたのである。

さて、濡縁なりで、ぢかに障子を、その細目にあけた處へ、裾がこぼれて、袖垣の絲薄にかゝるばかり、四疊半一杯の古蚊帳である。

「……ゆきかへりに、潜らせようつてつもりですが、まあ、あとで中を御覽なさい。」

然う言つて、幹事の白尾は、さら／＼と蚊帳を押しながら、壁を背高く摺つて、次の室へ抜けて行く。．．．．．續くと、一燭の電燈、――これも行燈にしたかつたと言ふ。――朦朧として、茄子の牛が踞つたやうな耳盪が黒く一つ、眞中に。．．．．．青く錆びたわたしを掛けて、鐵漿壺を載せ、羽毛楊枝が渡してある。．．．．．横斜に、立棹の臺に、圓形の姿見を据ゑた。壺には念入りに鐵漿を充してあるので、極熱の氣に蒸れて、かびたやうな、すえたやうな臭氣が湧く。

「巫女の言ぐさではありませんが、（からのかゞみ）と云つた方が、眞個は、こゝに配合が可いのですが、探した處で磨がないでは、それだと顔がうつりません。――いろいろ／＼凄い話を聞いて、こゝへ来て、ひよいと覗く。．．．．．恚う映ると」
「首を伸ばした白尾に釣られて、齊しく伸ばした頸を、思はず引込めて眞三は縮まった。

「我ながら氣味が悪からうと言つたつもりなんです。．．．．．眞夜中の事ですからね。――

その窓際の机に向つて署名となると、是非こゝが氣に成るやうに斜違に立てました。――帳面がございます。葬禮の控のやうに逆とちなどと言ふ惡はしてありませんから、何なら、初筆を一つ……

「

「いや、いづれ。」

と言つて、眞三は立つて覗いた。丸窓の小障子は外れて居て、外に竹藪のある中に、ハート形にどんよりと、あだ蒼い影が、ねば／＼と、鱗形に溶けさうに脈を打つて光つて居る。

「仕掛ものですよ。」

「蒟蒻。」

「いえ、生烏賊で。」

いきれにいきれて、腥く、暖くプンと臭つて來る。おはぐるのともつれ合つて、何とも言へない。……それで吐き戻したものがあつた。――

床の間には、寫で見知つて居る、應擧の美女の幽霊が、おなじく寫して掛つて居た。これは、長崎の廓で、京から稚い時かどはかされた娘に、癆咳の死際に逢つて、應擧があはれな面影を、たゞ其のまゝ

に寫生したと言ふ傳説の添つた繪なのである。目の
きれの長い、まつげの濃い、下ぶくれの優しい顔が、
かりそめに傳ふる幽霊のやうに、脱落骨立などして
居るのでない。心もちほどは寔れたが卵の毛ほどの
疵もなく、肩に亂れた黒髪をその卵の花の白く分け
て、寂しさうにうつとりして、しごき帯の結びめの
堆いの、却つて肌のかぼさがあらはれて、乳の
あたりはふつくりと艶である。大きく描いて、半身
で、何にもなしにつつと、軸の宙で消えて居る。
香爐に線香を立てて、床に短刀が一口あつた。

「魔よけだと申しますから、かた／＼。．．．
では蚊帳の中を一つ。．．．あとでは隔へ襖を
入れますつもりです。」

敷居からすぐに潛つたが、唯、見る目も涼しく、
桔梗の藍が露に浮く、女郎花に影がさす、秋草模様
の紹縮緬をふはりと掛けて、白のシイツを柔に敷い
た。桃色の小枕ふつくりと媚かしいのに、白々と塔
婆が一基（釋玉）。ーとだけ薄りと讀まれ
るのを、面影に露呈に枕させた。頭に捌いて、字に
はら／＼と黒髪は、髻を三房ばかり房りと合せたの

である。ぬしありやまた新あたに調しらへたか、それは知らない、たゞ黒髪くろかみの氣きをうけて、枕紙まくらがみの眞新まあたしいのに、ずる／＼と女をんなの油あぶらが浸にじんで居あた。

「あの行燈あんどうには苦心くしんしました。第一だい、金かねが出て居あます。」

と笑わらひながら、

「古ふるさと言いひ、煤すすけ工合くあひ、鼠ねずみの巢すのやうなぼろ／＼の破やぶれ加減かげんを御覽ごらん下さい。．．．四谷怪談やくわいだんにも使つかふのを、其そのまゝで小道具こどうぐから借出かりだしました。淺草あさくさでしてね。俳優やくしやの男衆をとこしゅうが運はこんだんですが、市電しでんにも省線しやせんにも、まさか此奴こいつは持込もちこめません。――

づうと俾あづかで通とほしですよ。」

「自動車じどうしやも大袈裟おほげさとなりますと、持もちものに依よつては、電車でんしやでは氣きがさしますし、然さうなると俾あづかです。

．．．．．

と、ふと、もの思おもふ状さまに、うつかりした様子やうすで眞しん三さんが言いつた。

「私わたしも、―― 昨年さくねんですが、塔婆たふばを持もつて、遠とほ

道みちを乗のつた事ことがあるんです。」

「へい、貴方あなたが塔婆たふばを

と、古行燈ふるあんどうの目めを移うつして、槇まきの顔かほと枕まくらを見みた。視み

たが、

「おや、塔婆たふばが眞白ましろだ。」

と、熟ぶつと白尾しろをが瞳ひとみを寄よせ、頬ほを摺するばかりをかし

く傾かたむいて鼻はなできいて、

「白粉おしろいだ。 誰だれか悪戯いたづらに塗ぬつたと見みえま

す。ちよツ馬鹿ばかな 御覽ごらんなさい、薄化粧うすげしやうで

すぜ。此この様子やうすぢや、 信女しんによ とあ

る處ところへ、紅べにをさしたかも知しれません。」

「はあ、此この塔婆たふばは、婦人ふじんのですか。」

問とふ聲こゑも何なんとなくぼんやりする。そのわけ

で 枕まくらの色いろも、閨ねやの姿すがたも、これは、一定然ぢやうぜん

もあるべきを、うか／＼聞きくのであつたから。

「勿論もちろんです 何處どこか、近ちかまはりの墓ほ地ちから

都合つがふをするやうに、私わたしたちで、此家こゝのうちへ頼たのんだ

んですが、それには、はなから婦人ふじんのをと言いふ註文ちうもん

でしたよ。」

然さらぬだに、魔まの行燈あんどうと、怨靈おんりやうの灯ひと、蚊帳かやの色いろ

に、鬱し沈んだ眞三の顔を、ふと窺ひつゝ、

「尤も、無縁なのを、．．．．それに、成りたけ、折れたか、損じたかしたのをと誂へたんです。

「見ましたがね、此の塔婆は、随分雨露に曝されたと見えて、半分に折れて居ました。．．．

」

「で、婦人だと分りましたか。」

「確です、（信女　　）最も、さゝくれ
ては居ましたが。　　何か、貴方？

「いゝえ。」

と、やゝはつきりして、

「何でもありません．．．．唯、此處へ來ます
道に、線路の踏切があります。．．．．停車場
から此方は、途中眞暗でした。あの踏切のさきの處
に、一軒氷屋がまだ寝ないで居ましたが、水提灯が
一つ、暗くついただけ、暖簾は掛ばなしで、誰も人
は居ないので。檐下に、白と茶の大きな斑犬が一
頭、ぐたりと寝て居ました。　　あの大坊主
と道づれでしたが。．．．．彼奴、あの調子だか
ら、遠慮なしに店口で喚いて、寝惚聲をした女に方

角をきゝましたつけ。――出かゝると、寝て
みた犬がのそりと起きて、來かゝる先へ、のすんで
す。――私は大嫌ですがね。――「犬が道案内
をするぞ、大先達の威力はどうだ。」ツて坊主は
得意で居ました。踏切がこんもりと、草の中に乾い
た川のやうに、恚う高く土手を集いた處で、その、
不性たらしい斑が、急に背筋に畝を打つて狂つて飛
上るんです。何だか銜へて、がり／＼噛りながら狂
ふんですよ。越すのに邪魔だから、畜生畜生！・
・・・・・嗽鳴ると、急にのろりとして、のさ／＼と伸
びた草の中へ潜りました。あとに其の銜へたものが
落ちて居ます。――「寶ものかと思へば、何だ、
塔婆の折端を。」一度拾つたのを、然う言つて、
坊主が投出す。――あゝ、草の中へでも隠したら、
と私が思ふうちに、向うへ投つたもんんですから、
斑犬がぬいと出て、引銜へると、ふツと駈けて、踏
切むかうへ。・・・・・もう氷屋の灯の届かない處
へ消えたんですが。「何の塔婆ぐらゐ。・・・・・
犬に骨を食はせるも悟だぜ。――また説いて
聞かせよう。・・・・・だが、見ねえな、よみぢ見
たいな暗がりの路を、塔婆の折を銜へた處は犬の身

體が半分人間に成つたやうだ。三世相ぢやあねえ、よく地獄の繪にある奴だ。白斑の四足で、面が人間よ。中でも婦のは變な氣味合だ。轆轤首は處女だが、畜生道は、得て眉毛をおとしたのつペリした年増だもんだな、業晒しな。「……私はい可厭な心持で、聞かない振をして黙りこくつて連立つて來たんですが——此の塔婆も、折れたんだとお話してすから、ふと……何だか、踏切の、あの半分ぢやあないかと言ふやうな氣がするんです。」

「怪談々々。」

幹事は陽氣に軽く手を拍つて、

「そのお話を、是非一つ、會場の廣間で願ひませう。少々、蛇體を加へて、こゝに胸から上、踏切の尾の方と言ふやうな事になれば實ものです。ねえ、禎さん。」

塔婆が青い。びく／＼と蚊帳が揺れた。

「え、飛んでもない。」

「何、そのかはり樂屋では何でもない事——幾らもあります事です。第一此の塔婆だつて、束にして、龕朶、枯葉と一所に、位牌堂うらの壁際に突

込んであつたなかゝら、（信女）をあてに引抜いて来たツてね、下足の若い衆が言つて居ました。折れたのも挫げたのも、いくらも散らかつて居るんですよ。」

眞三は、それでも引入れられさうに黙つたが、

「——（釋玉——）とだけ、あとは、白い撫子を含んだやうに友染の襟にかくれて居ますが、あなたは、そのあとを御存じでせうか知ら。」

「……見ました、下は（香——）です。——（釋玉香信女）です。確かに、・・

・・何ですか、一つまくつてお目にかゝるとしませぬか。」

眞三は、手を壓へるやうに犇と留めた。

「串戯にも、女の字へ、紅をつけたらうなぞツてお話でした。塔婆は包んでありません。婦人の裸もおなじです。」

幹事は、世情に通じて、ものゝ分つた人である。

「あゝ、よくお留め下さいました。——決して此のゝ蒲團はまくりません。——が、何か、

貴方、お氣になさる事があるんですか。」

「さあ、いゝえ。」

「が、それでも。」

「戒名に、一寸似たのがあるんでしてね。」

「いや、それは。それならお氣になさいますな、なさらぬが可うございます。この宗門の戒名には、おなじのがふんだんですよ。……特に女のは、恚う言ふ處で申しては如何だけれど、現に私の家内の母と祖母とは戒名がおなじです。坊さん何を慌てたんだか、おまけにそれが、……式亭三馬の浮世床の中にあります。八百屋のお柚の（釋縁應信女。）——喧嘩にもならず、こまつ了ひます。」

寂しい聲だが、二人で笑つた。

「さ、その氣であちらへ参りませうか。」

「いづれ悉しいお話を。」

「あ、蚊帳から何か出ましたかね。」

眞三はゾツとした。が、何にも見えない。

「……小さな影法師のやうなものが。」

「私たちの影でせう。」

と、行燈の左右に立つて、思はず四邊が■はされ

たやうにふはりと寄ると、思ひなしか、中ずいて、塔婆に映つて、白粉をちらりと染めると、唇かと思えて、すつと絲を引くやうに、連子の丸窓を竹深く消えたのである。

幽霊の掛軸は、直線を引いて並んだ。行燈の左右の此の二人の位置からは見えない。が、白い顔の動いたやうな氣勢がした。

「考へものです。―― 發起人方、幹事連と、一應打合せて、いまの別亭の事は誰にも言はずに、人の出入りをしないやうにした方が可いかとも思ひます。」

植込を返しながら、白尾がしんみりと葉の下に沈んで言つた。

「……廣間が暗くなつて居ますね、……最う會をはじめました。お氣をつけなすつて。……おゝ、光る……」

「いなびかり。」
「いゝえ、樹の枝にぶらり／＼と、女の乳を釣したやうに―― 可厭にあだ白く、それ、お頭の傍にも、」

「えゝ。」

「あちらが暗くなると、ばかりノ、光り出すと言つて、……此家の料理方の才覚でしてね。矢張り生鳥賊を、澤山にぶら下げましたよ。」

もとの縁側。それから廊下は明るかつた。が、廣間の暗中に吸込まれて、誰も居ない。そのこぼれた裾、肩が、女まじりに廊下に背ばかりで入亂れる。

料理場の前には、もう揃つた折詰の辨當が堆く、戸を壓して並んだが、そこへ幹事が通りかゝるのを見ると、蔭から、腰掛を立て、印半纏の威勢のいゝのが顔を出して、

「白尾さん。此の折詰を積んだ形が、大一番の棺桶などは、どんなものです。」

と手柄顔で言つた。幹事は苦笑をしたばかり。處へ、ほんの唯五六人で、ぼと／＼と沈めた拍手があつた。會の趣が趣であるから、故と遠慮をしたらしい。が、丁ど發起人を代表して、當夜の人氣だつた一俳優が開會の辭を陳べ終つた處であつた。

眞三は幹事の白尾と行きがかりに立留つて、人々

の背後から差覗いて、中を見た。十疊と八疊に、廻縁を取廻して、大い巳の字形に、襖を拂つた、會場の廣間は、蓮の田に葉を重ねたやうに一面で、暗夜に葉うらの白くほのめくのは浴衣である。うちはも扇も、ひら／＼と動くのが見えて、僅に廊下から明りを取つた並居る人顔も、臙を霞めて殆ど見分けのつかない眞中處へ、トタンに首のない泥鼈の泳ぐが如く、不氣味に浮上つたのは大坊主頭であつた。

「分つた、分つた。――それ、いま發起人

の言つたとほり、御銘々話を頼むぜ。……妖怪、變化、狐狸、獺、鬼、天狗、魔ものゝ類、陰火、人魂、あやし火切、生靈、死靈、幽霊、怨念、何でも構はねえ。順に其處へ顯はかせる。棍元教の大先達が、自在棒を押取つて控へたからには、掌をめぐらさず、立處に退治してくれる。ものと、しなに因つては、得脱成佛もさして遣る。……對手によつては、行力が手荒いぞ。」
と煙草盆をガンと敲いた。

「女小兒は騒ぐなよ。如何なるものが顯はれよう

とも、涼しい顔で澄して居れ。が、俺が恚う構へたからには、芋蟲くさい屁びり蟲も顯はれて出はすめえ。恐れをなすな。うむ、恐れをなすな、棍元教の傳澤だ。」

「……もし／＼。」

「大先達の傳澤だぞ。」

「もし、お先達。」

と俳優がすつきりと居直つた。

「あなたのお氣に入るか何うかは分かりませんが、此の會は、妖怪を退治たり幽霊を濟度するのが趣意ではありません。……むしろ、怪しいもの、可恐いものを取入れて、威すものには威され、崇るものには崇られ、怨むものには怨まれるほどの覺悟で、……あるべき事ではないのですが、ろくろ首でも、見越入道でも、海坊主でも。」

ひや／＼と低聲で言つたものがある。

「こゝへ顯はれるのを迎へたいと思ふんですから、何うぞ、行力も法力も、お手柔かな所で願ひたいん

です。」

今頃は、大勢で拍手した。此の坊主、みな面が憎かつたに相違ない。

「半分わかつた。―― さあ、はじめろ。・・・
・・とに角何でも出るやい、ばけものゝ出たところ勝負だ。」

と音を強く、ぐわんと又煙草盆を木棍で敲いたのである。

もの争ひがあつては、と中に立つらしい氣構で、
白尾は人をわけて座へ入つた。

海岸らしい。―― 話の様子で。―― (避暑中の學生が、夜ふけて砂丘の根に一人、浪を見た目を大空の星に移して居たが、渚をすら／＼と通りかゝる二人づれの女の褻に、忽ち視線を海の方へ引戻された。月なき暗い夜に、羅の膚が白く透く、島田鬚と、ひさし髪と、一人は水淺葱のうちはを、一

人は銀地の扇子を、胸に袖につかつて通る。・ ・ ・
・ ・ ・ 浪がうつすりと裾を慕つて、渚の砂が千鳥にあ
しあとを印して行く。ゆく手に磯に引揚げた船があ
つた。丁どその胸のあたりへ二人が立つた。が、船
底が高くつて、舷は、その乳のあたりを劃つて見え
る。)

一人、談者の座にあつて恁く語る。・ ・ ・ 此
の話、槓が座に加はつて聞いたのは、もう二時を
過ぎた頃であつた。―― 先刻、白尾と別れて
からは、何となく、氣屈し、心が鬱するので、ひと
りもとの幹事室へ歸つて、出來得るなら少時身體を
横にもと思つたが、こゝも人数で、然うも成らない。
あの若い藝妓は、もう其處には居なかつた。それは
それで、慙意なものも見知越なものも、いづれも廣間へ
出たらしく、居合したのは知らぬ顔ばかりであつた。
が、心易く言を掛けられるのに、然まで心も置けな
いで、幾らか胸は、開けたが、しかし、座に久しく
成りすぎる。媚かしいのも居たゞけに、然ういつま
でも妨ぐべきではあるまい。些と彼方へもお顔を
言はれるにも、氣がさして、われからすゝむともな

く廊下を押されて、怪談の席へ連つた。人は居餘るのだから、端近を求むるにたよりは可い。縁から片膝ずれるほどの處へ坐ると、お、お、と話中だから、低い聲だが、前後に知合の居たのも嬉しくつて落着いた。時に聞いたのである。・・・前の筋道は分らない。(ー)渚の二人の女は舳を切るか、そこへは白浪が、ざあざつとかゝる。大方艦へ廻るであらう。砂丘つゞきの草を踏んでと、學生が見て居ると、立どまつて居た二女が、ホ、ホ、と笑ふと思ふと、船の胴を舷から眞二つに切つて、市松の帯も消えず、浪模様の裾を其のまゝに彼方へ抜けた。・・・(ー)

恰も此の時であつた。居る處の縁を横にして、返れば斜に向合ふ、そのまゝ居れば、背さがりに並ぶ位置に、帯も袖も、四五人の女づれ、中には、人いきれと、温氣にぐつたりとしたのもある。その中から、恁う俯向き加減に、ほんのりと艶の透く顔を向けて、幽かな衣の身動きで、眞三に向直つた女があつた。

「あなた。」

「……………」

「槇さん。」

「あ。」

と云つたが、其の姿は別の女の背と、また肩の間に、花瓣を分けたやうにはさまつて、膝も胸もかくれて居る。明石の柳條の肩のあたりが淡く映つた。

「今夜はよく入らつしやいました。」

「は。」

もとより怪談最中である。聲あるだけに、ものいは低かつた。が、また此の折には、あちらでも、こちらでも、ひそ／＼話が泡沫に成つて湧いたから、然までに憚るでもなかつたので、はつきりと聞えたのである。が、誰だか分らぬ。思ひ當る誰もない。

「失禮ですが、つい……………誰方ですか——

暗いので。」

「暗い方が結構です。お恥かしいんですも

の……………あなたには、まことにお心づけを頂
きまして、一度、しみ／＼お禮を申したう存じまし

た。
」

「・・・失禮ですが、全く何うも・・・」
「え、あの、私の方は、よく存じて居りますんですよ。・・・」

(ー) 然うすると、二人の女が、船を抜けて、船を抜けてから、はじめて、その何とも言へない顔で、學生を振向いて、にこりと笑った。村の方では、遠吠の犬がびよう／＼と鳴くし、丑満の鐘。・・・)

「可厭ですね、まあ、犬は可厭でございます」と。
」

一層聲が低かった。が、うつとりと優しい顔、顔、顔よりも、生際がすつきりと髪の毛の艶が目立つた。

「坊、もも可厭ですわ。」
「何處に居ます。いま・・・」
「あ、あれ、かねつけ蜻蛉が飛びますの。」
此の聲がきこえたらう。女たちの顔が、ちら／＼

と亂れて、その瞳も、その髪も、恰も黒い羽のやうにちらついた。ひら／＼ひら／＼。

眞三にものを言つた女は、その中の誰であつたか、袖のいろ／＼に紛れて、はら／＼と散る香水と、とめきの薫に紛れたのである。

話も丁ど一齣らしい。

とに角、きゝ取つて居たのが、一同に氣を放ち、肩を弛めて、死んだ風が渡るやうに汗に萎えた身體は皆動いた。

「誰方が泣いて在らつしやりやしませんか。泣いて在らつしやりやしませんか。……御婦人のやうですが。」

幹事白尾の聲である。

「泣いて在らつしやるやうですね、——御氣分の悪い方があるんぢやありませんか。」

泣いて、……泣いて居る……と囁く聲が、ひそ／＼と立つて、ふと留むと寂然とした。

「間違ひでしたか——大丈夫ですな。．．．
．．．それでは誰方がか、又お話を。」——

談者一人、脱いで居た薄羽織を引かけるのが影の如く窺はれて、立つて設けの座に直つた。

再び、眞三の右斜めの、女の肩と、女の胸との間へ、いまの美しい顔が見えた。

「私ですよ、泣いて居ますわ。」

濡々とおくれ毛が頬にかゝるのが、ゾツとするまで冷く見えた。

「坊主が可厭で．．．可厭で．．．」

私．．．坊主、さ、何處に居ます。」

思はず膝を立て、聲を殺しながら、其の女に差寄つて聞いたと思ふと、

「え、坊主？．．．」
と振向いて聞返したのは、翡翠の珠も眉に近い、

それは幹事室で見た先刻の藝妓であつた。――
此の連中が四五人居たので。中にいまのそれらしい
面影は煙にも見えない。

「失禮しました。」

「極りも悪し、摺り状に退つた。心は苛立つ、胸は
騒ぐ。……」

「坊主は何うしました。」

「何うしました？ 坊主は、坊主は。――身近

な處から顔見知の人たちに、眞三は、うか／＼と開
き廻る。……さあ、何處へ行きましたかと云

ふ。今しがた其の邊に見えたと云ふ。……何
等の交渉のないのも居た。――坊主――

坊主？ ー 幾度も、煩く口を出したと云ふ。會
の方から故障が出たと聞いたのに、たよりを得て、

うる／＼人なかを手さぐりで、漸と白尾を見て、囁
いて聞くと、私たち三人が／＼で片傍へ連出して、

穩かに掛合つたので、何うにか静つて黙つたが、あ
の八ツ頭を倒に植ゑたやうな頭は、いま一寸見當ら

「どうかお聞き下さい。．．．お鬱陶しいで
せうが、お聞き下さい。――僕は洋畫かきの、
それもほんのペンキ屋ですが．．．」

槇眞三は、閨の塔婆に引添うて、おなじ枕頭にま
くつた毛脛に、手がつかないばかりにして言った。
――いま此の數寄屋へ入ると同時にハツと思つ
たのは、大坊主が古行燈の灯を銀の俵張の煙管にう
つして、ぷか／＼と吹かして居た處、脂を吸つたか、
舌打して、ペツ／＼と憚らず蚊帳に唾を吐いた。
あゝ、其の勢で行られては。．．．蚊帳を捲つ
て入る處へ、つか／＼と上るのを、坊主は見返りも
しなかつた。

「何をなさるんです。」
「行力を顯はすのよ。」
それから、あらたまつて謙遜りつゝ言つたのであ
る。――

「私には、たいせつな先生があります。たゞお若
くつてなくなりましたが、それは世に有名な方です。」

其の墓が青山にあるんです。去年あの震災のあとに、石碑が何うなつたらうと思つて、まあ、火にも、水にも、一息つけるやうに成ると、すぐに参りました。……たゞもう一なだれです、立派な燈籠は碎けて轉がる、石の鳥居は三つぐらゐに折れて飛んで居る中ですから、口惜いが、石碑は臺の上から、隣の墓へ俯向けに落ちて、橋に成つて居たんです。

――管理所を尋ねて、早速起し直すやうに頼みました。――木で鼻をくゝると言ふのはその時の應對でした。――金に縁めさへお着けなさらなければ今日中にも起します、尋常の御相談ですと、來年に成りますか、來々年に成りますか、そこは承合へません、墓どころぢやないでせう、雨露を凌がないのがどのくらゐあるか知れませんか、御華族方だつて、まだ手をつけちゃ居ません。――と、取つてもつけない情なくもあるし、癩にも障りませんでした。……大勢の弟子のうちから、地震に散ばらないのだけ、四五人誘合つて、てこに、麻繩、鋤、セメントなんどを用意して、シャツにズボンばかり、浴衣に褌がけの勢で推出了たんです。が人の注意で、支度ばかりしましたものゝ、鋤もセメントも何う使

つて石碑を起すんだか誰も知りません。――知
合の墓地近くの花屋から、とに角、監督だけにと云
つて、ほか仕事で忙しい石屋の親方を一人頼みまし
た。此の石屋が皆の意気込を買つてくれて、さし圖
どころか自分で深切に手を添へてくれた時、皆で抱
まはしに、隣の墓から、先生の墓所の前へ廻し込
で、一段、段石を上げるのに、石碑が缺けちやあ不
可い、と言ふと、素早い石屋が、構はねえで、バシ
リと半分にへし折つて、敷いてかへた塔婆が一本、
ぢき鄰のではありません。一つ置いた墓地ので。

――尤も倒れたのを引出した事は知つて居ます
が、……それが、此の塔婆です。戒名は御婦
人です。」

と、やゝ息せいで、ハンカチで汗を拭つて言つた。

「故とらしいと思ひますから、友だちの見ない間
に、もとへ戻して、立掛けて、拜んで挨拶をして、
其の日は済みました。――氣に成りますか

ら、……ずつと十二月までおくれましたが、
墓詣の時、茶屋で聞いて、塔婆のぬしの菩提寺がわ
かりました。其の菩提寺が遠方です……遠方

と云つて、……むきは違ひますが、其が此の土地なんです。」

「虚構へるぜ！」

と冷笑つた。大坊主はじろりと顔を見た。

「いや、拵へ事では決してないのです。墓所にはまだ折れたのが其のまゝでありましたから、外のと違つて、然う言つた事情で、犬にも猫にも汚させるのが可厭でしたから、俵ではこぶと菩提寺へ持つて来て、住職にわけを言つて、新に塔婆を一本古卒塔婆の方は些少ですが心づけをして、寺へ預けて、往かへり、日の短い時の事です。夜に入つてから青山の墓へかはりの其の新しいのを手向けたんです。――（釋玉香信女。）――施主は小玉氏です、――忘れもしません。……誓つて然う云つた因縁があるのですから、私に免じて、何うか、此の塔婆は髑らないで下さい。」

「髑る。」

――髑るとは何だ。」

(その10)

「これは申過ぎました。何うか、お觸りに成らないで、おくんなさいまし。」

「觸るよ、觸る處か、抱いて寝るんだ。何、玉香が、香玉でも、女亡じやは大抵似寄りだ、心配しなさんな。其の女ぢやあゝるめえよ、――また、それだつて、構はねえ。俺が濟度して浮ばして遣る。……な、昨今だが、滿更知らねえ中ぢやねえから、こんなものでも觸るなと頼めば、頼まれねえものでもねえが、……誰だと思ふ、たゞ人と違ふぜ。大根元教の大先達が百ものがたりの、はなれ屋の破行燈で、塔婆を抱いて寝たと云へば、可恐さを恐れぬ、不氣味さにひるまない、行力法力の功德として一代記にかき込まれるんだ。先づ此奴は見せ場ぢやあねえか。」

「ですから、手をついて頼むから。」
「頼まれねえ。たゞ人とは違ふよ。好色からとばかりなら、みやうだいを買った氣で、一晚ぐらゐ我慢しようが、俺のは宗旨だ、宗旨だよ。宗門がへをしると言つて誰が肯くやつがあるものか。昔のきりしたんばてれんでさへ、殺されたつて宗門は變へなかつたぜ。」

「私の親類だと思つて。」
「不可え。」
「姉だと思つて。……妹だと思つて。」
「不可え！」
「ぢやあ、己の家内なら何うするんだ。」
「氣色ばんだが、ものともしない。」

「矢張り抱くのよ。」
「坊さん、——酔つてるな。」
「何を、……むしやくしやるから、臺所へ掛合つて榎で飲んだ、飲んだが、何うだ。會費ぢやあねえぜ。二升や三升で酔ふやうな行力ぢやねえ、酔やしねえが、な、見ねえ。……玉に白粉で、

かもじと來ちやあ堪らねえ。あいよ、姐さん。」

「止さないか。」

聲をおさへて、眞赤な木棍で、かもじをつゝいて、
「白粉に、玉と、此の少し、蚊帳に映つて青白く
つて、頬邊にびんの毛の亂れた工合よ。玉に白粉
と。……此奴おいらんで居やあがる。今夜の
連中に此のくらゐなのは一人もねえ。」

土蜘蛛の這込む如く、大跨を蜿つてずる／＼と秋
草の根に搦んだ。

「野郎。」

かはす隙なく、横ぞつぼうへ、坊主の棍を浴びな
がら、塔婆を颯と抜取つて、眞三は蚊帳を蹴た。

「これが庭の方へ遁げられると仔細はなかつ
たのである。」

小盾も見えず、姿見を傍に、追つて出る坊主から
庇ふのに、我を忘れて、帷子の片袖を引切りざまに、
玉香を包み、信女を蔽うた。

「此の野郎」

ぬつくりと目さきに突立つ。

かゝる時にも、片袖きれた不状なるよりは・・・
・とや思ふ、眞三は、ツと諸膚に拂つて脱いだ。
唯、姿見に映つた不思議は、わが膚の恸くまで白く
滑らかだつた覚えはない。見る／＼乳もふつくりと
滑らかに、色を變へた面もさながらの女である。

此の膚、此の腕に、そのトタンに、二撃三撃を激
しく撲れた。撲れながら、姿見の裡なる、我にまが
ふ婦の顔にぞつと見惚れて、亂れた髪の水に雫する
のさへ確と見た。やあ、朱塗の木棍は、白い膚を虐
みつゝ、烏賊のニれが臭を放つて、また打つとゝも
にムツと鼻をついた。

「無禮だ、奴入道。」

眞三の手が短刀に掛つた。

筆者は・・・實は、此の時の會の發起人の一
人であつた。敢て言を構ふるのではないが、塔婆の
閨の議には與らない。

槓君は腕の骨を損じた。棍元教の先達は木棍を握つた手の指を落した。眞三は殺すまでもないが、片手は斬落さうと思つたさうである。

二人は、まだ病院に居る。

怪我は此だけでは済まなかつた。芳町邊の一むれが、幹事まじりに八九人、こゝの大池の公園をめぐつて、しら／＼あけに歸つたのが、池の彼方に、霧の空なる龍宮の如き御堂の棟を静な朝波の上に見つゝ行くと、水を隔てた此方の汀に少し下る處に、一疋倒れた獸があつた。蘆の穂が幽に、おなじやうに細い残月に野末に靡く。あたりの地は塵も留めず、掃き清めたやうな處に、その獸は死んで居た。

近づくと白斑の犬である。だらりと垂れた舌から、黒い血、いや、黒蛇を吐いたと思つて、聲を立てたが、それは腮のきはりをかけて、まつすぐに小草に並んで、羽を休めたおはぐる蜻蛉の群であつた。

こればかりでない。その池のまはりをしばらくして、橋を渡る、水門の、半ば沈んだ、横木の長いのに、流れかゝる水の底が透くやうに、あゝ、また黒蛇の大なのが、づるりと一條。色をかへて、人あし

の橋に亂るゝとゝもに、低く包んだ朝霧を浮いて、
ひら／＼と散つたのは、黒い羽にふは／＼と皆その
霧を被つた幾十百ともない、おびたゞしい、おなじ
かねつけ蜻蛉であつた。

觸つたもの。たゞ見たゞけでさへ女たちは、どツ
と煩らつた。

塔婆は幹事、發起人のうちで、楨君から、所をき
いて、良圓寺と云ふので心ばかりの供養をした。縁
類は皆遠く他國した。あはれ、塔婆のぬしは、仔細
あつて、此の大池に投身したのださうである。

― 場所は、たいがい、井の頭のやうな處だと
思つていたゞけば可い。

【完】